

赤い顔で怒ってるぞ

池間哲郎(58)は、沖縄で生まれた。

アメリカ軍政下の少年時代、嘉手納基地のちかくで過ごした。米兵による沖縄人の暴行、殺人。なのに、本国に送り返されるだけで罪にとれない。

池間は、米兵とみると、けんかをふっかけた。いつも、こてんぱんにやられ、仰向けに転がった。〈われたちは人間じゃないのか。サルなのか〉

29歳のとき、結婚式などのビデオ撮影を生業にした。35歳のころ、台湾観光の様子を撮影する仕事を受けた。そこで偶然、日本人による貿易ツアーの現場を見た。10歳ぐらいの少女らが賣われるのを待っていた。

〈こんな子どもたちが、どうのくらいいいるんだろう〉 フィリピンのゴミの山をたずねた。「夢は何?」。全身が真っ黒によごれた少女は、問い合わせに答えた。

「おとなになるまで生きることです」 自然発火したゴミの山。煙が上がっていく空を見上げて、池間は誓った。貧しい中で懸命に生きる子どもたちの支援に、一生をかけよう

池間は1999年、沖縄に支援団体をつくった。現在のNPO法人「アジアチャイルドサポート」の前身だ。何万人もの子どもを支え、

池間哲郎

(58)は、沖縄で生

カンボジア、スリランカなど

大量の税金投入。官官接待、

超円高……。

直井は夢想した。みんなで施設をつくりてきた。1年の中うち2カ月は、東南アジアを中心めぐる。

4千人ほどのサポートーーの会費や、さまざまな募金で、年1億円ほどが集まる。

現地での池間の表情は、いつも厳しい。「笑顔で人の命は救えない。愛さえあれば、は絵空ごとです。大切なお金の管理、マネジメントに、甘い顔はできません」

5年前、東京にも事務所をかまえた。所長は、妻の理恵(43)。看護師をしていた当時、白血病の元妻を看取った人だ。

池間夫妻は昨年3月10日、墨田区の経営者ら150人ほどがつくる会「赤い顔」から「下町平和賞」を受けた。思

いやりの精神でがんばっているというのが表彰理由だ。

墨田に、創業から90年近くになる「アクセサリー・マルタ力」がある。「赤い顔」は、この会長、直井高一郎(73)が中心になってはじめた。阪神大震災と地下鉄サリン事件が起きた1995年は、直井にとって、腹が立つことばかりだった。住専問題への



池間哲郎さんと理恵さん

直井は夢想した。みんなで空に向かって叫んで、天外界で跳ね返って世界にこだましたらなあ。そして年の瀬に会を設立した。「赤い顔」は、怒りのしるしだ。

池間のようないき方を考え、いい世の中にじて解散する。それが目標だが、活動をはじめて17年、その日が近づく気配はない。

池間が賞をもらつた翌日、東日本大震災がおきた。

3週間後、池間は被災地へ支援に入った。寒空にふるえながらも、ぐずらず、泣かず、耐えている子どもたちの姿に、心を打たれた。

復旧が進まない現状がはらだたしい。「政府や政治家は何してる」。お決まりの言葉が出てしまう。

池間の事務所には、スカイツリーのミニチュアが飾られている。「赤い顔」からもらった賞の副賞、直井の会社でつくった高さ80cm、人工ダイヤをちりばめた工芸品だ。

ふつうの暮らし、かけがえのない日常を、だれもが一生懸命生きられるように。怒る必要がない日が来ることを祈つて、池間はスカイツリーを見上げる。(編集委員・中島隆)

このシリーズは、文を中島と秦忠弘、写真を伊ケ崎忍が担当しました。

直井高一郎さん